

特116

710



5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

始



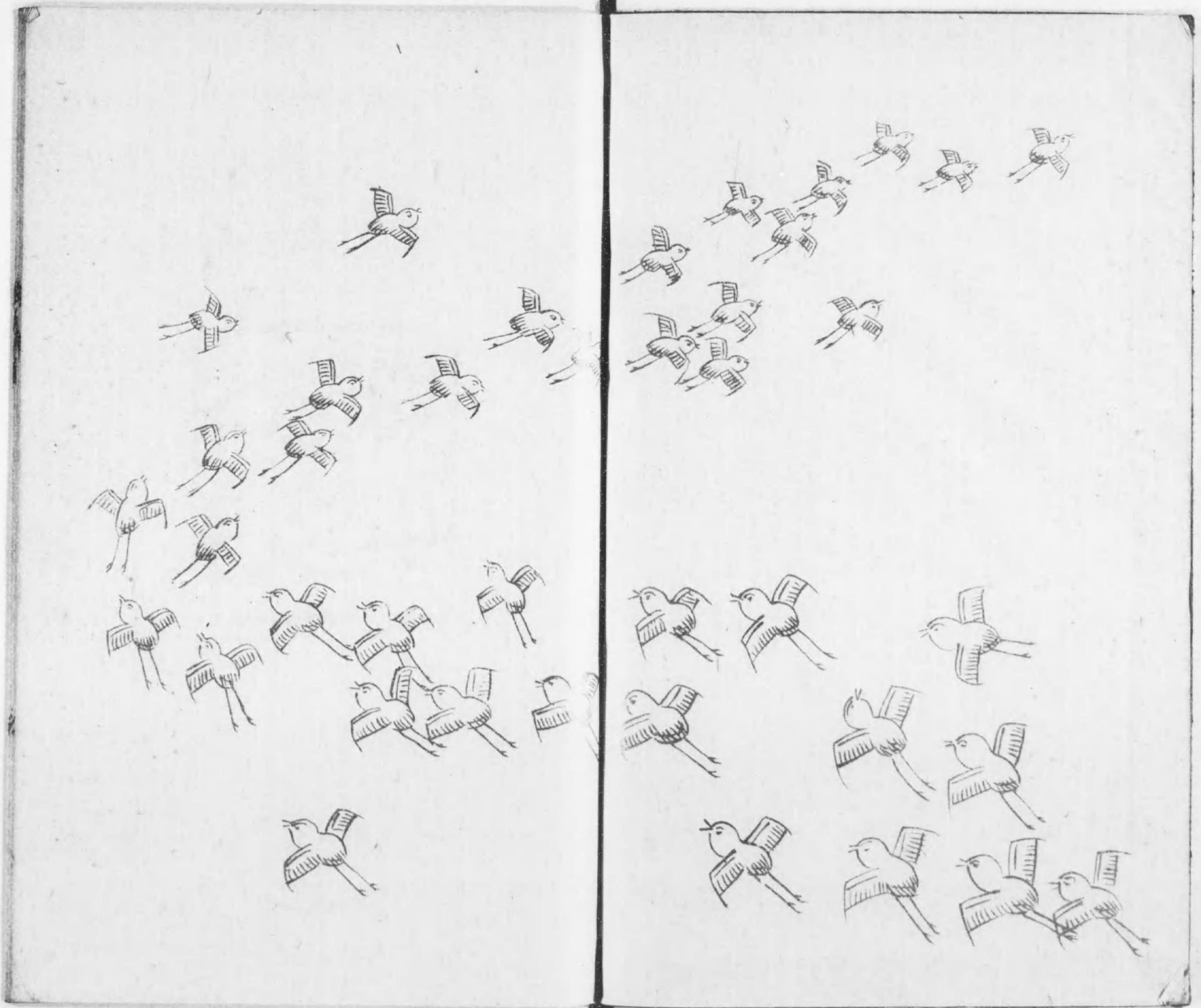
觀世流改訂諸本

外十

特116

710





特116  
210



之清觀  
所之也

大正  
10.11.21  
内交

文學博士

井

上

頼

國

木

文

監

修

明治四十年

丸

岡

桂

本

文

解

并補

訂

正

解解并補訂正

附

附

附

附

附

附

附

附

附

附

丸

岡

桂

本

文

解

并補

訂

正

解解并補訂正

附

附

附

附

附

附

附

附

附

附

山

崎

樂

堂

柏

子

附

再

訂

正

解解并補訂正

附

附

附

附

附

附

附

附

附

# 合浦

## 解題

合浦に居する時、時の太守の貪慾を起みて其產地を更へて、孟嘗といふ人太守となりて其政を布きたる馬、隨び合浦に還りて產すに到れりといふ。又即の漢の代の傳説と、數人といふ海中の生物甚く匯き、注けば波濤となるといふ。南海の古傳説も取り合せ、これを十訓抄に見えたる。漢武帝一日昆明池にて死な人とせる體を殺ひ除ひしに、其體夜夢に現れて喜び、翌日再び幸へる時、明珠珠を奉りたりといふ。報恩の傳説によりて脚色下たる曲なり。曲名に合浦の字をえてたるもあ。古き別名をかつほの玉といふ。看闇日記に永享四年二月仙洞街術にてかつほの玉の上演せらるる記録あり。又春日大室若宮御祭、漢國の田樂の軸の曲名中にも处あり。古く田樂にて演じたりと見ゆ。漫に行はるものは文甚短く、ことに今を教はれたることに對しての詞也。原作の文を省略したる跡、悉然たれども、古き原文の傳はるもの無く、これを對比すべき由無し。該曲の解案の作と思はるも古き廢曲に白鳥(一名、嘉慶)あり。

## 詠ひ方梗概

軽き曲なれば然トてさらりと度みなく扱ふが宜し。シテ、あれべー。此心得にて一聲を流ひ、調に移りていかに放屋の内と云々は無なろべくよ。難なりとも云々は稍軽に、舞食は抜けぬやうに取りてさらりと扱ふ。今は何をか云々の調はすりりと出て、今をつかれより脚か軽に、免えぬ實となるべからずを指確りと詮ひて地に據す。續は一聲にて明快た頃矣たらべー。出づ新女は云々は手足く確りと詮ひ、これこそ長物の玉の筋のはまり調子よくすりりと扱ふ。口辛トアロヘー。馳トアロヘー。初の上歌は氣を忍けてさらりと附け、一河の流とのハリを取か確りと、下がより前の位に處す。歌人渡云々は末つてどつりと附け、報せさんとより運びを附くる心。幸リはさらりと歌りてこれまで初の上歌は氣を忍けてさらりと附け、其後開度氣を束せて夷やかに詮ひ納む。

## 合浦

漢書に合浦郡武帝置、離陽南九千一百九十一里と見ゆ。廣東州の西端廉州の傍に、人、連金浦太守、即不產穀實而海出殊實、與交趾政境、常通商貿、貿羅糧食、先時寧守、五多食歲、荒人族、不知紀極、殊無佳於交趾即界、行旅不至、人易血資、食者鐵丸於道、嘗利官卒易前卒、求民病利、赤端歲去殊復還、百姓皆反業、商貨流通、稱為神明。碧巖集に漢江出津、津中有明珠、到津後月出、津於水面灣開口、合月光盛而產珠、合浦珠是也。寧傳說也。わだつ

又 海の古語。正一にはあたのみ。以下、海の底に通はせて、そことも知らぬといふを白波にいひかけ。波の立つを龍にかけて龍の部を立起す。龍の部とは海底にありとせらるゝ龍宮にて、湯傳說に海の底なら生物は皆これに屬する如く扱はるゝを常とする。戸ぞ一づるに 戸を開ぢて一村雨の雨宿り 一樹の陰に宿す。も地主の様なりといふ古語を引く。平家物語に旅人 が一村雨の過ぎ行くに一樹の陰に立ちすりて云々。水鶴 水鶴は水邊に棲む涉禽類の鳥。鳴く聲は「ち」といひ、人の来りてテを叩くに擬して詠まれたり。多とも家の外 久方の云 萬葉集「ここには更に宿を乞ふを叩く水鶴によせていへる事」。多とも 俗の表。久方の云 の聲に「ち」の方の植生の小屋に小雨あり、床さへぬれぬ身に擦へる聲とあるを引く。初句は「ち」といふべきを、外面に立つ事えりとゆり、また天(アメ、アマ)に冠するを例とす。歌詞を辭を隔て、發音同トき雨の語に冠らせんため、「久方の」と云ふかへたるなり。植生の小屋は「いぶせき」の使屋、床さえぬればは床の寒く冷えたればの意にちこへたりとも見らるんども、されば「床さへ濡れぬを説り傳へたらなるべし。」然しては次のひち笠雨の歌に優けんよすが無し。またわきも子は原歌のあきもと共にいとほりと思ふ。妻又は女を呼ぶ古語。雨もやふらん、一叶をさ。あまやどり、やどりて田長などを心に置きて詠りりと見ゆ。頼む木と蔭 木産の枯れし子と云々。又麻原席房の歌「いかにせん頼む蔭とて」主ちよれば「おもむとに辭をともる。」

一樹の蔭 之前の一村雨の雨宿りと詠けたるは鎌本の文に同ト。典據一日夫妻、皆是先世法服、太平記に「樹の蔭にやどり、同ト風を汲むも、皆是他生の悔済からずなど。但、缺世ならぬ要なり」と詠けたるは鎌本の文に同ト。

圓 命を助け般人 眼鏡註、注則出洋と見えたるは此曲に作る所と今いたる。又異物志に「漁舟出金浦、長二三尺、背上有甲冑とも見えたり。」と見えたれば、それこそ金浦の玉の事を記せるもの圖書にありてや。魚の精 月中の雲霧がれば作為也。これを金浦の玉の事と記せるもの圖書にありてや。魚の精の精とて作れるなり。

絶えぬ寶珠 永久不衰の寶。寶珠 今思を報すといふ音を取く。寶の珠即ち金浦の玉。今

の東洋乍れども、金浦の地南海の東に一交通不便なり。」

め、中央支那に種々の傳說を傳へりなり。 渚 水白魚云 単に白き魚とすりたゞの意に過ぎず。杜たるひれふりて 平使一への意を轉か。無垢世界に生を得たることを因品に見ゆ。如意の寶珠 佛經に、亦ある所は意の如く其ゆうり出づと云ふこと。宝珠を以て南方便す。火に入らも焼かれず、これらの功德ありと見ゆ。龍王の腹中すり出づとも傳へられ、龍宮に寶とせらるゝといひて、海中、又は龍神に圓する傳說多し。思出本語の「ねじり珠」をなす。春水 菩提比ぶれば地獄の底のものに過ぎずと自ら卑下したる意とも寫し。其の如き奈落や奈落といひ重ねたるは別意あるに非ず。うたかた上の意と見てす。眞如の王 虚妄なしの謹なり。春水 菩提

绝对平等の體の清淨圓滿なるを玉に譬へ一詞。般人の誠心。玉の鱗 言ひ一古語。壽命長遠 自滅延命 玉の保にて度の音を放けて生す。金光明經に見えたるは、度成男子に度成する事と度同一して斯く作れりて、こには度成男子の願を成すの意と見らべし。度成男子とは女人が男子に度成することにて、佛頂に女人は五障ありて佛頂の器に非すとなせらを蘊藏する唯一の法法なり。法華經に渡けらる婆羅龍王の女も一度男子に度成して後往生を得たるなり。國經證度多品に「當時衆會皆見三尊文忽然之間度成男子」。故本文に「度成就の法をす」とあるは「度をなす」の意なり。玉はふたゝび歸る 最初の金庫の解に引く。最初の金庫の故事「去陳に開を寄せ、般人一たび寶珠を與へて思を報す。無病延命の誓をなして復び寶珠と共に

五番目  
畠勝能

## 合浦

無季 ワシキテ 畠人精(前ハ童子)

早行

これに唐土合浦と申す處よほよひを  
う者こそは。今朝の日もうらしくある程よ。

浦よ出て釣籠を眺めよやと思ひ。  
わたくみのそこそちいまや白浪の龍の  
都とおもうまい。いよ此度の内よ主や  
ましまを。一夜の宿を貸し終へ早

はや暮れて。テギツつゝよ。宿と。誰も  
 あ。まも。ぞ。シテ。誰かうらも。其情よ。  
 トモ  
 一村雨の雨宿り。一夜の宿を、借終へ  
 早  
 附く水鶴の外、面よ立つやえ方の植生  
 の小屋よ小雨降る。床防えぬれぞ  
 早  
 我様子づ。ひぢぎの。雨降りまぬ雨  
 宿り。雨にあつきぬ雨宿りの頬む木蔭  
 ●小説

や。樹の蔭の宿りも此せふらぬ弊  
 あり。一村の宿を、ひみて知る。今浦の  
 浦のほどう。魚類もあらず。而恩  
 の眞情を、知らざらん。眞情を、知ら  
 ざらん。何と見申せども更よ人向  
 そと見え給を。左をあひのうへ  
 シテ  
 今何をうちじがわらへ。鮫人といふ

魚の精あり。命をうがれまし。報  
謝の為よあつたり。我があく庭の露  
の玉絶えぬ寶とあらげまあり。地十才  
猿ヤマト持ハサウエて命恩ミタケ。寶珠カチ持ハサウエし  
捧ハサウエげて久浦ヒロイシもいらせ給ハサウエへと前マサニある。  
諸ナシの波ハシのよ。ゆよと見ハサウエもうるぎ。向ハサウエ  
魚ハサウエとあつて其儘ハサウエひれハサウエて失せよ。

けり跡ハサウエひれハサウエて失せよけり。來序十八  
後シテ上  
龍ヨウ女ハス如意イチイの寶珠カチを釋尊ハサウエよ捧ハサウエげ。  
完成ハサウエ就ハサウエの法ハサウエをあハサウエ。大東ハサウエ菩薩ハサウエや奈  
落ハサウエの底ハサウエの白魚ハサウエあれどもあと命恩ミタケ。  
報ハサウエせざらひと。は立ち驕ハサウエき。朝ハサウエうづま  
いそ。うちたかこのよよそ現ハサウエれたり。井傳  
シテハサウエ。それとを眞ハサウエ物ハサウエの玉ハサウエの緒ハサウエの  
キハサウエ。地ハサウエトハサウエとを

直和の玉の緒の。壽命長遠息災  
延命の寶の珠。當來までの。二世  
の願も。成就あつゝとれはまでありや。  
織つる綾の浦。金浦。珠。二度。帰つ  
ば。千秋萬歳の寶の珠。千秋萬  
歳の寶の珠。金浦の浦。よそ。やまと  
ありけり。

合浦の三

## 生田敦盛

## 解題

古く別名を生田といふ。平敦盛の遺子、賀茂明神の靈夢にあり生田の森にて父の亡靈に逢ふことを作れり。二百十番詠目錄に「生田敦盛、澤風作」と記し、能本作者注文には生田を澤風の作として舉げ、且つ服能と記せり。されど此曲服能に非す。ふくに生面といへらは同名別曲大や、拂服能と記せるが誤なり。敦盛の遺子のことは史に所見無し。平氏滅亡の後世に種々の傳聞傳はり中た敦盛の子思に附きての巷説をも生じたるべきか。或は亦謡曲作者の創作に成るにや。他に同じく敦盛遺子のことを作れら廣曲高野敦盛あれど、これは此曲より生まれたるものであるが如く。信ほく優戚忠度に似たれど、それよりも軽き曲なり。唯全曲に恩愛の情味掬すべきものあるを宣へとす。シテ

生きくとて品  
は庵の内にて獨言つ聲。されば其趣を擇て高からぬやう精靜に扱ふ。さうとて餘りに抑へて老人の如くをも  
を好まず。愚人の心や。まことに心持を更へ往軒がすくみて。雇りとあらべし。無能心やなしこのサシは  
依くならぬやう少しくもかた出て。さとも自身。氣を軒が更へてはつきりと。謹の行き。終りの  
一句を心持して止む。クセの上端は稍大きやかに。謹ふ。接しやかに。おもは心持を改めてすらうと。舞後の  
「あれに見えたるは」とうとの調は力を籠めて確りと勢よく言ひ。これどうう舞。舞事の心をもべし。  
物語りあわくれには出を前ひかげて丈丈に。恥か。や子ながらも。は心持して調子を内へ取る。子方

聲を高め取りてすら。とあらべし。サシは殊勝の心ならべく。ワヰ

尋常ならべ。道行との問答は普通のう敦盛とは云は。氣の抜けのやうかいつてあづ。ワヰ

は少しく許した龍が下歌の如きとあらべし。袂にすがりしきには  
下歌のかき調子にて精靜に。クセは餘りさらりとは扱はず。さうとて沈むべからず。名残盡きため心  
かなはシテを承けて運び。好く誰ひいかと見れば。云は修羅乗りて地みなく。馳れつる。以下又秦勢  
を保ちてさらりと誰ひ。修羅の敵との吟歎。より普通の往たり。月落み渡りて。以下は火。吉。舞  
の物語に扱ふべく。手は廣うと出で。立ち去る次第は。すく氣をかけて運び。其まくにて誰ひ。網む。

地

初の下歌は子方の心持を承けておつとむと出づべく。上歌は稍さうとあらべし。袂にすがりしきには  
下歌のかき調子にて精靜に。クセは餘りさらりとは扱はず。さうとて沈むべからず。名残盡きため心  
かなはシテを承けて運び。好く誰ひいかと見れば。云は修羅乗りて地みなく。馳れつる。以下又秦勢  
を保ちてさらりと誰ひ。修羅の敵との吟歎。より普通の往たり。月落み渡りて。以下は火。吉。舞  
の物語に扱ふべく。手は廣うと出で。立ち去る次第は。すく氣をかけて運び。其まくにて誰ひ。網む。  
十餘年。高倉天皇安元元年。四十三歳の時念佛社主を宗是とする津土宗を開けり。建磨ニ  
年正月。八十歳にて歿す。里谷は比叡山の西麓にありて。其退隱修道の地をもすせに。里谷十人。賀茂

## 解題

## 生田敦盛

山城國愛宕郡にある賀茂神 下向 尊き地より他に赴くをいふ詞。さかうり松 愛宕郡一束寺村に社をさす。上下二社あり。則には歸り途といふ程の意。さかうり松ありきと傳へらるゝ名松は、山中より京都に至る通の傍なり。俗に一條障子と傳ふら一條は一秉の誤たり。俗に相應に旅への意たて、もとは曲詠あたりけに調度類など取りそらへあひしきす。手箱 ひとまとみを入り匣。尋常にてからへ身俗に瀧須磨と称ふ。千鳥川の西、界川の東長さ三十町に満たず。鐵柵鉢伏の山瀧其背を、園み瀧渓三所あり。一谷二谷三谷といふ。一の谷は平家の城郭を構へし處なり。若石女性天板元禄放能本皮ひ寶生奉る者「若き上魔」であり、上魔は身分貴き女を呼ぶ稱。 敦盛 平敦盛の季子。徒五位下たちしむが宮中に藏掌なか戦に熊谷直實に殺されし。以てせば傳へて考し。時に十六歳（源平戰表記）とし十七歳（平家物語）ともいふ。敦盛た遠見ありしこと、史徵無し。平家亡びし後、種々の風聞せに傳はりしうちに、敦盛の遺子たつきての傳えもありしも。或は又平氏系圖に信濃守四家の子たる源敦盛（大學少光）の子敦盛。日朝して行ふ法事又は祈願の終了 所がらなる云。其地の有様既に神々さへ、社殿に朱塗の玉垣結すらこと。事滿ちて人殺すら意。所がらなる云。れわたりて、麻羅に何となく尊く奉せらるとの意。心も澄みて云。玉葉集に「廟く毎に頼むるを掌みまほし。寶生の社の御手洗の聲」とあるやうき心よじて面手を洗ひ。深き雪に御手洗の水の深きとて後に歸すらだり。昔は父を抱せらる。摶せらる。摶手ひ糺の神 神の誓のふしきを糺にいり。糺の神とは愛宕郡下鴨村なら。糺の森た鱗度ましますにさう。下鴨神社を呼ぶ浦橋。あらたに靈験あら御寶殿 神 生田の森 城郭を築きし時、大儀にてかまししたる處なり。平家の森を大儀の木戸口とぞ定めり。山陰の云 新古今集の歌「吉野なら葉摘の川の川邊に山陰の、食茂の宮居につきたりけり」など。山崎 山城國乙訓郡にあり。今大山崎村といふ。 壁川を隔てて、西は擴津國三島郡に接せり。 水

無瀬川 大澤山及ひ大代山より出で尾西して水無瀬に至り淀川に會する川。長さ三重。水無瀬は風も身に。むろ水無瀬川の川風も身に。むろを表きて旅衣と寝け風。秋は來にけり。云  
新古今集の歌。昨日たゞ訪はんと思ひし津の國の生田の森に秋は  
今は用ひられど。古くは用ひられし雄扇なり。是田の小野を金扇の背景とせり。  
五辻もとより 云 五辻は佛教の語。色度想行識の受取込み知覺の像。想は事物を想像する心の場。行は外物に對して聽り食ら等の善惡に因する心の  
傷識は事物を了別識。知する心の本体なり。舊は蘆集とて此五者集会して個人の心身を形成する謂なり。五辻は假に集会したものなれば一度死すれば離散して空に歸すとする。般若心經に「五辻は白室に或は游走の意。 面々 者々が死者のためより。 面々の意。幽魂 或は游魂の字か。くはく 文字考へ難し。前述蘆集書には詩句を奉げ  
撫子の云 いくつも思ふ。幼児を撫子に渝へたら用例多きを以て撫子の花と承  
佩文韻府にふ附。以下幼児の間王 地獄王の略。地獄の主なり。佛說に閻浮洲の南方、鐵圍山の外部にあって地獄に来る者を審判し懲罰すと。花鳥風月 春の花と鳥と秋の風と月と時節時節の風流。管絃の遊。木曾の機 木曾作

生田政盛

に攻め落されしを飾つていふ。木雪の櫻は信濃の名所にて  
歌たも多くよまれたれば、かけと云はん序に置きたり。花の都を立ち出でて、壽永二年平  
威に敗れ、安徳天皇を奉じ神器を擁し、京都を逃れ西海に奔りしをいふ。  
の住まい、平氏一族都を逃れて筑前の太宰府に至り更に廣島の屋島に徒りしをいふ。  
葉さ、東生田の森、西一の谷の向を固ひしをいふ。立ちかへるとへ、鄧  
るゆくて浦波大後け渡の港むといふ。たがて須磨といひづぐ。  
西門一の公倉に向ふ。大持として城後の  
向通鶴越より敵の不意を襲ひなら、雪や霞のち、勢を得、獲福原大運りて城を守  
の盡したたらを櫻弓に掛け、弓の張により矢竹と張けて彌縫せんじ掛け、更に竹の様にて心もよわく。  
美く櫻弓は櫻の木にて作れる弓がたどこには修辭の連鎖とへたらままで櫻の字に意味なし。  
彌縫心は丈史の、あはれも深き云々の深きを生田川  
秀み進む心なり。受けても津の國の生田の川は名のみくりけりといふ。歌をよみて女  
投げても津の國の生田の川は名のみくりけりといふ。歌をよみて女  
の生田川に投身せし物語あり。之を數戦の歿死の事だ傍りていふ。よしよかりける。  
子鶴鶴の云々を承け、袖ふれといはんための連鎖にて全く意味無し。百萬の龍にも、親子鶴  
鶴の袖がれざ  
片時、火し修羅の敵をさす。修羅は阿修羅の略。佛境にていふ。六通の一から修羅過  
殺伐する戰争の有様を修羅の戦たるへ戦死者は皆此過た墮し。死後も猶阿修羅を  
敵とへて開眼の苦患より離らること無しとすらこと、謹め作者の慣用筆法なり。蜻蛉の云々  
立ち去る姿の消えゆく意をうかがひ、新於遠集の故、晴玲の小野の蓼茅生風ぞ涼しきなど  
た辭を借りて隠り、蓼茅より露霜と傍り、蓼茅が原に置く露霜の如く消え失せなる様な作  
りが詰らぶの小野は大和の名所なり。さうしたは筆かられども文草の後として用ふ。

## 一番目

## 生田敦盛

七月

子方 敦盛道子  
ワシテ 平敦盛  
キ法然上人 従者

早行  
トハ、黒谷吉然上人よ仕へ申す者よ  
てよ。よそよあたりゆくへ。或つ時上人  
賀茂へ度余詣。下向の時、下りねの  
下よこ歳があう。あつ男子の美一きを。  
手箱の蓋よのれ。尋常よ極へ捨て  
置きてゆか。よく不便よ思一められ  
置きてゆか。よく不便よ思一められ

抱かせ。門前つらひて。づくへ育て給  
ひは程よ。はや十歳よ。門前餘りゆ。父母の  
あれ事を歎き。絵ひは程よ。後アフタの後  
この事も。門前語り。と。聽衆の中  
より若き女性のきづき。我が子よ。と  
由術せ。わ。密よ。門前ねりば。一年。の  
谷よ。討たれ。絵ひ。穀盛のあすまて

おぞき。此事を聞き。絵ひて。夢  
よ。あう。と。父の姿を見せて。絵をうる  
へと。賀茂の明神へ。祈セイ。ある。き。由  
竹せられ。ひて。一七日。詣で。絵ひ。ぐ。日  
は。や。滿敷そひ。程よ。同道車。賀茂  
の明神へ。奉詣申ゆ。これには。や。賀茂の  
明神よ。と。座よ。よ。く。成祈セイ。

チ方サンヨ  
ヨクアリサナヤ處からあらうち社の。あけの  
玉垣神さびて。ども澄めうら手洗の。  
深き惠を頼むあり  
カタマリ  
オカ  
草すよあり

上段  
もたらしねの其面影を見せ経へ  
や・かくもあり。祈る心のまよげ。祈る心  
のまよげ。恵よあざき浦河へまと。  
也言の神もよ願を焉カタマリ  
オカおさ

まや願を焉カタマリ  
オカおさります。あら不  
思議や。少一睡眠のうちよあらなよ  
靈夢カタマリを蒙りては。あらめでたやあ  
は靈夢のやうをあらが詰カタマリの  
宝殿カタマリのうちよもあらたあらうち  
聲よ。汝夢カタマリよがつとも見えと  
思ひ。じてより津の國生田の森

あれど。あらたよ靈夢リョウムを參りて。早  
といへ不思議ある事アザキモノのやう。  
黒谷クマガヤへ下停りあつまアツマむがく。これ  
より生田オシタの森ミズシマへ供申ヨシメルべ。やうて  
思ノメルまちマチ道行上ミサハシ山陰サンゲンの賀茂カモ  
の官居カムイをまち出アマツツバフ。賀茂カモの官居カムイと  
まち出アマツツバフ。急アマツ行くアマツハ山崎サンザキや。霧アマ

をも度アマツ水無瀬ミズセ川カワ。風カキも身カラよまむ  
旅衣リョウイ。秋アキへ來アリよけり。きのよだよ。訪アリん  
と思ひ。津ツの國クニの。生田オシタの森ミズシマよ著アマツき  
よけり。生田オシタの森ミズシマよづきよけり。急アマツ

名所よしよ。あはよ見えたる野鳥邊  
生田の小野よもやさら。まち寄り  
眺めやと思ひど。とかこを眺めに  
程よはや。日の暮れてはよ。あはよ  
燈火の影の見えど。ふく家よもあうげ  
よ。まち寄り宿を借らそやと思ひふ  
シテサシシ上  
五箇ヨク 落ちかづきて皆空行よむつて

平生此身を愛せん。軀を守らば魂  
夜宵よ飛び屍を失ふぐ魄れ秋風よ  
嘯く。あらひよどのをうからやあ  
早かよ  
不可思議やあことある草の魔の内よ。  
うち花やうある若武者の。胸骨を轍  
一見え合ひど。といへりある事や  
か。シテ黙の人のがやあ。聞こへま

じあつ給ひも。われよ對面のためから  
ぎや。恥や。あがらまくの。敷盛子方から上う坐靈  
あうたりの。う敷盛地蔵とく我アシカト。  
身シルよも覺ハラタクえをきりよう。被ヒツよも  
さうたえヒラとされ。被ヒツよもがうたえヒラとされ。  
あく音エヌスよまうつる鳶アヒの。寧ホトトギスよまの嬉ハラタク  
一ヒナカタが。憂クモリめ身シルよあゆうアヒがうアヒ。

かく思シテいとシテ頼マヘぬ。夢ウツの契シガを恨ハナフ  
いとシテもシテも。無ムカシ転シテやシテ忘メテれ  
形ルイ見ミの撫マサニすの花ハナやシテある。身シルあれ  
ども。衰カクへはづる墨カタマリ凍リの被ヒツを見ミうこそ  
哀カクあへ。さとも身シル奉行ヨシケイの心ハコ等シテ  
ゆゑ。賀茂カモの明神ミツマタよ歩ハシを運ハシび。夢ウツよ  
あうとも我アシカ丈シテの姿シルを見ミせてたび給ハシ

仕舞

へと祈聲を由キ。明神、憐みあり。す。  
廻王よ竹せつをす。廻王竹せ承り。  
鷲の暇を賜う。親子の妻も  
今を限あらべ。更け行く月の夜  
ももがら昔といづや譲らん。然るよ  
平家の榮華を極め。その花鳥  
風月の戯れ。詩歌管絃の様どよ春。

秋を送り迎へよ。あらわすりあり  
けん。本曾のかげは。懸けてだよ思  
ひぬ。翁よ蔭かれて。主上を始め奉り  
一門の人も悉く。花の都を立ち出で  
西海の空よまきぬ。習む旅の道を  
がら。山を越え海を渡り。鷲の天さ  
かる。部の住まじの身がりよ。又立ち

晴る浦波の須磨の山路や一の谷。生  
田の森よ著きあらば。とて都も程近  
い。のんとも喜びとあらう。  
云や霞の如くよて。轍わざとて  
ども早家へ運む。櫻弓の。狂ふも  
弱くと。皆散りよあはて。哀も涼

さす田代の身を捨て一物語。語るぞ。  
あがりけ。喜いや。夢の  
契の假初あら。親子鸚鵡の袖ふ  
れて。左残盡をせぬ。心かみ。中舞  
あらよ見えたる。あるものぞ。あら  
向よの。行使。片時の暇。あり  
つよ。まごの座。參ひ得ぞ。向よ

地上

愁らせ給ひぞと 地上  
さよりと見ゆぞ  
不思議やあ。さよりと見ゆぞ不思議  
やあ。畜生儀よこちまう。猛火を放ち。  
劍を降て。其數知らず修羅の滿。  
天地を御骨す。満ち満ちたり。物を  
ありふれよ 驚けつる修羅の。  
敵ぞかと。左刀直向よ。さざ。

そやかとよきう廻り。火花を散して  
戦ひ。暫らくあうて墨雲みる。第  
よ立ちきり修羅の敵もぬちよ消え  
失せ。月澄み度りて明たら曉の  
空をさがりた。けり。やすの  
あづらも。さく苦みをみる事よ。  
五段エイキ。えべ。どうよ弔  
意を。帰りて。さき跡をねんどうよ弔

ひてたび絵へと。泣く泣く袂をうき  
別れ立ち去る姿へかげうの。小野の  
淺茅の露霜と形へ消えて、失せよ  
けり形へ消えて失せよけり！

## 草子洗小町

### 解題

清原殿の序載合に、大伴黒主、小野小町に勝たんとて前夜其私宅に忍び入り、小町が明日の放を  
知らざりしとぞ、とすり入がれて其草紙を洗ひ、入草の文字を磨して、悪名を書きことを作れる。草  
紙洗小町ともいはれり、暮して草子洗（丹子洗、草子洗）ともいふ。此曲黒主を悪人の如く作れる所、其名につ  
ちての聯想に外ならずも、事餘りに実現する所と、又時代異なる人々を一曲の中に納めたる所と、文章等  
の難火からざる所とにより、社説師まわりと難する者少からざらが、もとより假作に至らものかされ  
ばさしてあげつらふに及ばざらべきが、但し明和本は其構想を、善からずとて作意評文の上に  
大斧鉄を試み、甚しく其趣を更へなり。龍本作者、後文に世阿殊の作、二百十番、龍目録に觀阿殊作。

### 謡方梗概

「」浦は書齋に秋を案する心を專とし、サシ次下思にて静に一つともたら姿を宜とす。詞の  
中にて面白や水滸の草しおとは少く間をあけてさらりと歌を續むる所  
に在り、後は「ゆか」の「お」と運びの格らぬやうにさうりと出で、和歌の浦わたりよりクドキの味はひにて  
おつとりと通じて序のをうけたる無念のおもひあるべし。ワキと歌争引の開幕は毫も粗暴になら  
ぬやう特に注意し、飽くまでも口伝を保ちて優雅に演次りつて承け渡す。恐めりや北通の「ち」とは  
氣を更へて思する心にてすらりと、此歌古故なりとて「より再び」クドキにて、「」次のいかさま小町が、  
の詞は獨言の禁にて餘りに高めず、力、ルをさらりめに「北草紙」とよりクンシテ復かに謡ふとてが、宣  
くに云へば内へ取つて静に「論言なれば」、字とは拘引き立て、妻のぶなむべし。天の川脇に以下  
は、橋の振りて大きやかに、問れらせて、ロングの調子にて素直たるものうちに、迷有らやうからが宣  
くは袖にすう漸次火づ寄せて、ゆくのうく「熱く」は上に取つて、ゆくのに出で、人身落り  
つて、下クリの節振りを運び、好く振ふ。春未つては、ちくは一聲の調子にて長岡に住、大きく龍の萬事永  
解しなら妻のふを満ち、直に春風駒湯なら趣あるべし。次下共に北通を以て朝かに晴れかに揚ひ、ワカは  
晴れくと振ふ。貫之（ツレ）す、おの連答、場合をすがく、もじらべし。懶て王に對する詞にて、寧  
に言ふべく「水邊の草」の詞は歌を讀み上ぐらひと改めて、出一息おきて、詩かなくしてことはつきりと振ふ。王（子方）子役がればさうりと振ふ。黒主  
も凡て氣品高く振ふべし。黒主



れ給ひ。古今和歌集をさす。記貫之等醍醐天皇の勅命により萬葉集に漏れ落ちた古歌及び其以後の歌を撰集したるもの。勅撰の最初の集。勅撰 古今萬葉集と共に勅撰の如く扱へど、萬葉集は勅撰集に漏すからを古今集の眞字序に「平城天子詔侍臣令撰萬葉集」と見えたれば、こゝには斯く作る。勅撰 章者記貫之の誤にて實際は奈良朝に撰せられしものなり。讀人知らず。萬葉集には作者未詳と書き、讀人不知かと書ける例なし。平城の天子 古今集の眞字序の文字に従ふ。周年よりありて明た平城天皇を指すけれども、これは古今集序の橘諸兄の私撰にて而かも外理せざる草稿のまゝ傳はれしものなり。橘諸兄 指候に告島野の女帝の御代天皇勝寶五年には左大臣橘諸兄卿諸卿大夫等あつまりて萬葉集を撰はせ候ふとあら外、著書に橘諸兄の撰と見えたれば、いとよほ斯く作る。歌の數は七千首 實際は四千四百九十五首たり。衣通姫の流 古今集序に「大伴黑主之歌、古猿丸太夫之妻也」。猿丸太夫の血脈がれば其名に通じて、無名の酒を名なしの酒と歌によみ、立派の三位入通(後成)は富士の鳥澤を富士のならさと歌に詠み入れて、君無しの大將なるその入通と並び呼ばれ、夫のものとなるしに強からぬ馬歎合に負けんことを憂ひ、古歌を盜みたらし通理たりと罵る轄に作り。橘大夫の流れも 古今集序に「大伴黑主之歌、古猿丸太夫之妻也」。橘大夫の血脈がれば其名に通じて、無名の酒を名なしの酒と歌によみ、立派の三位入通(後成)は富士の鳥澤を富士のならさと歌に詠み入れて、君無しの大將なるその入通と並び呼ばれ、夫のものとなるしに強からぬ馬歎合に負けんことを憂ひ、古歌を盜みたらし通理たりと罵る轄に作り。東無花の蓬ゆく 古今集序に「大伴の黒主は其名を残し、いはぐ將」 德太子左大臣は詞をたゞさずして無名の酒を名なしの酒と歌によみ、立派の三位入通(後成)は富士の鳥澤を富士のならさと歌に詠み入れて、君無しの大將なるその入通と並び呼ばれ、夫のものとなるしに強からぬ馬歎合に負けんことを憂ひ、古歌を盜みたらし通理たりと罵る轄に作り。四病 仁寿樹病、ニに風燐病、三に浪形病、四に瘡病、一に入通といふべきを大将と作り。卒忽といふべし。四病 和歌の様式の上に生じ易き四種の病弊。一花病といふ。もと妻撰式に由て梶原秋葉儀秋葉に解かる。ついで二字の種々。五心病二に亂思病、三に闘鬪病、四に瘡鳴病、五に花病、六に老楓病、七に中絶病、八に後悔病。二代八部 三代は古今後撰拾遺の三位撰集。北三代集に後拾遺、金葉、洞花、千載、新古今を含むて八代集といふ。ついで三代八部はこれを指す。但これらは歌集が北曲に名を列せらるべからず、直た後世の漢文からること殆無し。富士のなるさの大

る。往の同字の難は三代集八代集、轟轟の轟云 小町が胸の鼓動するを奈良の名所なら轟の轟に車の古今にいくらもあらへとなり。轟轟の轟云 掛け轆を渡らる危き心を小町の身の危きに兼ね、車ようちさみまへぎみの音便、天皇に寄り奉ら臣下云 呂は女官の居る場。局々の女房云 局は女官の居る場。清き流云 版謹本には「みかはの水」。青丹衣の風情云 青丹衣といふ謂耳。大和田氏は其著蓬ゆ辞釋に解説を試みたこの数字を冠す。青丹衣の風情云 これとも附会に過ぎて肯ひ難い。此讀意は「若然らざる時は、則の青丹衣の聲流するべし」とて、青丹衣は車ひ蔓けたらる質例の引用と見る。ト要當たゞべし。古歌者流の向に亘に、藤枝を罵りて難じ、余りたら別しあければ、これも青丹衣といふ謂につきて言ひ争ひ、終に争ひ負けたら先例を引きたる類には非ちか。人間さゝがなや云 外聞わる。しとの意。▲ 古歌謹本には「倫言かれは」ちの前に次の二節あり。其其能の形に更遠ありて其变速た本文を併はしのじて、大和田氏は其著蓬ゆ辞釋に解説を試みた。また、舟が前にぞ置きなれど、元緒以後これを謹本より除きなれば、これは青丹衣といふ謂につきて言ひ争ひ終に争ひ負けたる類には非ちか。人間さゝがなや云 外聞わる。しとの意。▲ 時御前の人々は、黄金の半持に水を入れ、白金の與取りそへて、小町が前にぞ置きなれど、元緒以後これを謹本より除きなれば、これは青丹衣といふ謂につきて言ひ争ひ終に争ひ負けたる類には非ちか。人間さゝがなや云 外聞わる。しとの意。天の川瀬云 下洗ふことを言ひて、文を後な第一章を廻じて萬葉集の草紙を洗はんとする意とせう。天の川瀬云 せう、七月七日の夜、蓬牛星と織女星に寄つて、天の川銀河を渡りて一年に一夜相會ふとの說を東ろく故に詠まれたれば、是美しきなすき。和歌の浦云 和歌を和歌の浦に掛けて、用ひる海草にて接き集むらものたゞより書き集のたゞ書研の意に轉用し横ばくたる詞。蓬塩草の緣にそ渡寄せかりと掛け、天の川瀬を思ひ起し、斯く纏められたる。雁の翅云 後拾遺集の被「薄墨空に書く玉草と見ゆるがよ霞のち空に跡る雁」がねを今は用ひす。桂圓若葉の頃云 和漢朗詠集に「水」。春の歌云 引くをもつてし。其一行は文字に似たれども、痕跡を留めがたれば、洗はんから無く、水の水れらや春立つけみの風やとくらん。傳古今集の歌「法保姫」とこの浦風美きぬらへ霞の袖にひくらへ波など胸にまきて、ひ歸らむるべし。水鳥の云 さて散れたる花と衣の袖の袖みを意を寫すらんや。頬川云 支那の島士洋曲の歌。島士傳に「洋曲頬川之湯」。竟名萬九州長由不欲爾之。洗耳於頬水瀬云 ちと北斎画を作りたら、龍曲詩曲二石葉父あれど、桂圓若葉の頃云 和漢朗詠集に「水」。春の歌云 引くをもつてし。其一行は文字に似たれども、痕跡を留めがたれば、洗はんから無く、水の水れらや春立つけみの風やとくらん。傳古今集の歌「法保姫」とこの浦の後とく前々句の「薄氷した對せしも、新千載集の歌「法保姫」の池の氷に馳り、水鳥は上の霜や壁はさららしくたゞに思ひ寄りたらんや。しのび草云 からむる謂無し。思ふに思ふに思ひ草

## 三番目

黒主

## 草紙洗小町

四月

子方  
紀貫之  
帝王

ツレ

シテ

小野小町

ワキ

大伴黒主

狂言

同從者

ミコト

エテ

これにて伴の黒主とて。まとも明白

内裏よて。即歌合あるべーとて。黒主う

あひてよん小野の小町や。即定めよ。  
小町と申も。即歌の。上手よそ。更よ  
あひてよん。竜ひがたくの程よ。あもの  
歌を宣めて。吟せぬ事へよ。ま。かの

小町サンシヨウ  
ヨワク

私宅へ忍び入り。歌を聞かせやと存る  
それ歌の原を尋ねるよ。聖徳太子ハ  
赦せの文仙。片岡山の製をうせじよ  
うめ給ふ。竹田さとも明日内裏より御歌  
会あるべきとして。小町があひての黒  
主を御定めゆひて。水鳥邊の草とよ  
題を賜やうたり。面白や水鳥邊の草と

りよ題よ深みといへいよ。蒼アカあくよ  
何を種とて深草のばのうねくく生  
ひ落つらん。此歌をやまと短冊ようう  
しまじらもんシテ入いよは唯今この歌を  
用ひてあるが、狂言かくしが承りては  
黒主何を用ひてあるぞ。當時かあくよ何  
を種とて瓜蔓まの。畠のうねをまうび

ひうびあるらん。引やさすよそへ  
あまが。道の道たうへ常の道よハあ  
らぞ。知れりを以つて道をも。不得心が  
ヨリよそゆる。唯今のが歌を萬葉の  
草よようづ。帝へ古歌を訴へ申し。  
あもの即歌合よ勝たゞやと存はワキ入  
黙主之次第上立衆  
めでたきは代の歌合。めでたきは代の

歌合。詠して君を作りん 時も  
頃に卯日半。清涼殿の邊會あれど。  
花やうよこそ見えたりけれ やくそ  
人丸赤人の古詠を掛け 署主之  
たる短冊を。われもそ取り出。か  
ら詠の前よそ置きたりけり。かそ  
て前の人どよん 小町を務め御内

の躬恒紀の貴之貴之右衛門の府生  
壬生の忠岑忠岑ひだりみさきより著座著座  
して其ノ所既既よ詠詠をぞ始めけるほの  
ほのと明月の浦の朝霧朝霧よ島隱島隱れけ  
ゆく舟舟かぞ思思よけよ島隱れけ也上承  
の月月のけよ島隱島隱れへる月月の渡路渡路  
の繪島國繪島國あれや。始めて歌の遊遊こそ。  
遊ニモ心

•小謡  
思思よモ

心和心和ぐ道道であれ。その歌人の名所名所も。  
皆庭皆庭上上よ並並み居居つて。君君の宣旨宣旨を待ち居居たり。君君の宣旨宣旨を待ち居居たり?  
いよ貫貫之之街街前前よりより始始よりより

小町小町があひてよし黒主黒主を定定めたう。まうまう小町小町が歌歌を讀讀み上げり上げり畏畏つては。水邊水邊の草草。時時うあくよ行行を

らも。既に衣通姫此道のまたらし事を歎き。和歌の浦わよ跡を垂れ絵ひ。玉津島の明神よりとの方。皆此道をたどりもじあり。それより今の歌を古歌とす。竹せひや。古今萬葉の敷摸よては。又家の集もとあるやうん。作者、誰もす。まもそぞ。委しく行せり。

種そぞ草の波のうねく生じ哉  
まろん 面白と詠みたう歌や。この  
歌よ勝アハよもあらぐ。皆アハ詠アハよ  
畏アハては 黒主 轉らへば。こへは古歌よ  
ては 何アハと古歌を申アハすか 黒主 まろん  
寄かん上 いづよ小町。何アハと古歌をアハ申アハをぞ  
ヨク恥アハの敷摸アハや。先代の昔アハそも知

竹の如く其證歌分明からでござり  
奉一由をじき。草子へ萬葉題へ夏。  
水鳥邊の草とハ見えたども。讀く知  
らぬとがれたい。作者へ誰ともなせ  
ぬあり。又、萬葉へ平城のまゐの  
虛宇。撰者へ橘の諸兄。歌の數へ七千  
首よ及し。皆わらわら知らぬ歌へかも

らをも。萬葉といふ草子より數多の本  
のゆうかほつかあうとそひへ  
それへなつ事あらざむ。あづら。序  
身へ衣通姫の流あれ。憐じ歌もそ  
強からねど。古歌を盜むひ道理あり  
かれておどり。まへの猿丸を夫のあざれ。  
それで猿猴の名を以つて。我づ名を

おもむく。花の落行く山賊の小町。その  
様時黒主。身がらね。何ぞて古歌  
かく。見ゆハセハシ。かく。詠コトハをたゞ。かく。  
詠コトハへ。富士のあゆたの大樽や。田病  
ハ病三代八部。甲カタ文字。も。も  
かほがの。あやまつ。昔ヨリカニも今カタマリも。

街アベ、あうぬべセヒ。不思議ハナシや。よきも本代ハタケも。  
三十一年の其ミうちよ。一字も變ハシケルらず。諺コトハ。  
みたる歌。といふ萬葉ミツバチの歌。からべ和歌ハタケの  
の不思議ハナシと思ハシケルべ。からべ證歌シテハを出ハシケル。  
せうの。宣旨度ミツバチ。かく。初ハタケ。立春ヨリセル。  
の題アベ。花も盡ハシケルぬと引き開ハシケルく。  
夏ハタケ涼ハタケ。も。繁草ハタケ。の。これこそ今カタマリの歌。

あうと。既よ讀まんとす。よぐれど。  
我が身よあたらぬ歌人さへ。胸よ苦  
き手を置けり。きてや小町の  
うち。唯轍の橋うち。度て危きび  
隙もあ。恨めや此道の大祖  
桺木のまうちをみゆ。小町をか捨て  
はて給よう。恨めやあ。此歌を歌

ありと。左右の大臣其外の局との  
姫廢たちも。小町ひとりを見絶へば。夢  
よ夢見るひちへ。またあらざる心  
か。此草子を取り上げ見れば。行の  
次第もあらざつゝも。よ草子の墨書き違  
ひたり。ひづき小町がひとり諒せりを  
黒玉をも向ま。帝へま歌と訴へ申

かんたぬよ。此萬葉の筆志たるを  
おぼえたり。餘りよ恥かうじらへば。  
清き意を掬ひ上げ。此草子を洗ひと  
やと思ひ。

小町へなまくよ申せ

さむ。若一又さかみのふらぐ。青丹衣  
の風情たゞぐ。さよすくは思ひ  
もせざるやつ方もあむ悲かなよ

地カナヘ國カナヘ、江カナヘ、海カナヘ、山カナヘ、木カナヘ、鳥カナヘ、人カナヘ、目カナヘ、耳カナヘ、心カナヘ、  
小町暫カナヘらしくて待ちゆへ。其由カナヘ奉カナヘ申カナヘまがる  
もて。しよ奉カナヘ申カナヘ。小町由カナヘ。唯今  
の萬葉の草子カナヘよく見ゆべ。ぞ。  
行の次第カナヘもよどつゝ。てよほの墨カナヘ  
せめ。草子カナヘしてよ程よ。草子カナヘ洗ひて見

なまじ由申は げよ王 小町が申を  
 神サムニ。まだ洗ひて見よと申ゆへ 畏モロコシ  
 て。じよ小町。較競カイギ。もあうぞ。急アハタそ  
 草子ハラシを洗ひりトヨシテ 編ヒダリ言ヒトツあれば撫マサニ  
 て。落ハラフる髪の玉タマ襷スルヤマ結ハシルんで肩スルよ  
 うちかけて。既スルよ草子ハラシを洗ハラフしと  
次第上和歌ワカの浦ウラの藤タチバナは草ハラシ和歌ワカの浦ウラの

藤タチバナは草ハラシはよせかけて洗ハラフしん 天アメの  
 川瀬カワセよ洗ハラフしと地 祓ミコトの七ナナ日の夜ヨメあうや。  
小町花色ハナコロ衣アガシの被ハラシよ地 梅シモツのよほひや。  
 あうらんアウラン口羊ヒツキハ地 雁ガの翼ヒタチハ文字モチツの  
 數ヒサシあれど跡シテ宣アハタめねアハタもあらアハタも地 頭カミ作ハサシ  
 よ耳アツを洗ハラフしと地 置ハサシれるやアハタも地 生ハサシ  
 しけりシケリ草ハラシの鬚ヒゲを洗ハラフしと地

川原よ解くら薄冰  
洗ひて霞の袖を解かすよ  
歌を洗へたの歌を洗へも  
歌を洗へたの袖も

地柏子  
洗へまよ

春の歌を  
洗ひて霞の袖を解かすよ  
歌を洗へたの歌を洗へも  
歌を洗へたの袖も

地柏子  
洗へまよ

寒き水鳥の上毛の霜よ洗もん上毛  
の霜よ洗もん。戀の歌の文字あれば草  
忍ぐさの墨消え  
涙ハ袖よ降り  
られて。忍草も乱る。忘草も乱る。

地上

小町

蓮

の

あそ

に

乱

釋教の歌の數々ハ

小町

蓮

の

あそ

に

乱

神祇の歌ト神葉の

小町

蓮

の

あそ

に

乱

よ袖ぞ乾ける

小町

蓮

の

あそ

に

乱

紅葉の錦あうけり  
住吉の久きねを洗ひて川岸よ亭  
もう白波をまつとやけて洗もん。洗ひ  
洗ひて鳥うあげて。見ゆど不思議や

といひ。數々の其歌の作者も題も  
文字の形も少くも亂ることもなく。  
ひ筆あれば浮草の文字は一筆も残  
らず消えよけり。もうがたやあうがたや。  
出雲佐吉と津島人丸赤人の阿恵  
かと伏一样み。喜びて龍顔よさ  
げたりや。よく物を案さうよ。

かほどの恥辱よもあら。自憲させ  
んとまかう立つ山河のうへ轉らく。  
此身皆以つて其名ひそりよ残るか  
ら。行かん和歌の友からん。道を嚮  
む志。誰もかうともあるべけれ甲玉河よ  
墨墨下。附前よ。道を嗜む者へ  
誰もかうともあるべけれ。苦からぬ事

座敷へ真づらへ  
黒はひれ又時の面目  
あらば。宣旨をいそで背く。かど里の座  
前よ畏り。地サシヨウ げよめうがたまひがまん  
かる。小町黒主貴様もく。小町よ舞を  
奉せよと。おと立ちより花の打衣。風  
折鳥帽子をなせ申し。笏拍子をうち  
座敷を静め。物著ヨク 春來つて。遍く

●仕舞

桃の水地スラ 石スラ よ障リテ 座スル  
来スル 手ハシ あづケ ざくら花ハナ の一枝イチジク  
地スラ も、色イロ の衣イフ や。重タメ ぬらんル 霞立タマキ 中ハタハタ 舞

●頭舟

地上スラ 日景ヒヨウ よ見ミ ゆる。ねハ 千代チヨド 本モト そト れハ 千代チヨド  
まで。四海シヨウ のはも。四方シヨウ の國カミ ども。民ミン の  
戸トト む。身ヒム ぬ。代トト そ。老エラ 年イニ の嘉カ

流下す。何あれ。大和歌の辯り。あらやねの土  
ト。素戔嗚尊の。守り。絵へつ神國。  
あれ。花の都の春も長閑よ。花の  
都の春も長閑よ。和歌の道とぞ。めで  
たけれ。

## 六 浦

### 解題

六浦の隣寺に机の古木あり。昔山々の紅葉未だ紅葉立ちに既木早くも紅葉たり。か  
ば。猿空鳥相御教を説いてこれを賣せし。販木心に功成り。を賣び。それよりて般になら  
も紅葉することなし。湖南は猿空が机を見て紅葉せざるを説きしに木の精既れて鳥相御の教を傳たらぬ  
譲をなし。其手を受け喜びて月前に詠焉したることを作れり。般につきての傳説も或は謡曲作房の創業  
に成らべ。前大浦祖はふか。般本作鳥相えに美竹の作。二百十萬緒同様に安浦作と傳へたれど、  
古記に詳見無し。但、行文古野の傳あり。

### 謡ひ方梗概

豊島の申にては往還き曲なり。然  
トて心のどかに優雅なうべ。シテ 前は年暮き里の女とて取り立て、ふ種  
つたうと扱ひ、開餐も静に受け應へ。いかにてて此一本に時漏れけんと發を令する心にて其前後と遡  
と更ふ。づく山に先きたつての詞への移りを不自然になりぬやう心す。以下詞海にそれぐら心持を表し。  
今は何をかつてもべき。おもを精確うといふ。謙は一様に前よりも華やかに美しからむ心なりべし。  
出のせしは後にすりりと落ひ、タリは引き立ても済りなく、次のサン下り崩ほを傳ひ。クセの上端はゆ  
るやかに大きかるべく。更けゆく月の云々はさらりと出で、力は陽ひくと  
朗かに。八聲の鳥もはまつて少一勝に。明け方の空のは跡かくりめに詠ふ。文句長ければだれぬやう注意を要す。開餐の  
中にて。ちりはつる。此一本の云々は改めてす寧に詠ふべきも、シテの後にならぬやう運ひは矢張りやら  
うた扱ふを宣一とす。千里の行ひ云々はウト隣りと言ふ。文句長ければだれぬやう注意を要す。開餐の  
中にて。ちりはつる。此一本の云々はシテを亟けてさらりと、せし亦同ト。クセは静なる方  
かれど流主ぬゆく心す。色なき袖をや。云々は序の身の前なれば静に大きくゆらりと落ひ。言葉残りて云  
々はシテの呼吸を承け。八聲の鳥も數々にはさらりと取つて、特も聞けると聲を聞く趣にてもつくりと、  
以下夷やかに詠ひ納むべし。

### 解題

東 国とへるも同ト。洛陽 京都の稱。但一故名抄に東京、羅洛陽城。西京、號長安

京(萬野經)又謂左京、唐名長安と見えて、洛陽はもと支那周の成王の都。たる洛陽に擬して左京を呼びた  
る稱なれども、後世左京の荒廢に帰せるに反し、左京は後第に繁榮に赴き一かは、洛陽は遂に京都の汎

標となり。陸奥 古の白河、葛多の二國より、本州の北端に至るまでの地。今の大國の名也。連坂の云  
連坂の關の移むらは、後藤豊臣其他の古跡に多くよまれたり。それを引き、移に者を重ねて通すが  
の關は古へ近江國源平郡連坂山にあり。關所、近江を初め東國に向ふ要路に當りたれば、連坂  
道行の流の初に置く。此句或は蟬壳の詠の「連坂の關の移村送きゆけ」を借りたりにや。蟬壳、夜な  
山を越えゆくといひ。

### 草枕

旅宿をいふ。もと草を束ね枕

星月夜

餘食山に冠

鎌倉

### 相模國錄

古事記久良岐郡の南部。今の大澤、金澤、谷利等附近

千里の行

老子の九

の九

唐之臺、起於累土、千里之行、始於足下に基き。

古漢に千里の行一步手始まるといへるを引く。

### 相模の國

ここに相模の國ト叶ひどん、前に

「諸倉過きて、六浦トイふ處にて渡船を待ちて、上陸へ越さんとて」と云々。

安房の清澄

安房國安房郡なる清澄山をいふ。山中にある

の故に、是地中古鎌倉と密接の關係ありて、いか

も近ければ、仰高思ひ送りて相模と作れるなるべし。

此渡

六浦村侍從川の南岸の邊を六浦の津

「諸倉過きて、六浦トイふ處にて渡船を待ちて、上陸へ越さんとて」と云々。

相模の國

いへる如く六浦の里は武藏の國なり。

「諸倉過きて、六浦トイふ處にて渡船を待ちて、上陸へ越さんとて」と云々。

相模の國

ここに相模の國ト叶ひどん、前に

る都人

あからさまに最初の意の古漢なれども、精後世には廢る、方無き意にも用

宋元

深キニ云  
為相卿のいかにて云々の説教をき  
す。この意とはここには初發の意。靈露の情  
言の量といふを草木の葉に見たて、  
草樹皆生  
雨露之恩。深キ御法  
深康き身といふ身の音を承けて御法と號く。  
御法を授くとは經文を讀誦して弔ふこと。佛果  
け行く云  
更け行く月、月の夜遊といひつて。月  
の夜遊とは月前の遊樂の遊の謂なり。色なき袖  
袖を身に着けぬ者を袖の精なれば特に色無  
き袖と  
秋の夜の云  
伊勢物語の歌。原歌には第三句「なせりとも」、末句「鳥やかなむ」とあり  
は痛快く覺えて、互に交才詞のまた盡きざるうちに夜明の  
鶴が鳴くならべーとなり。其歌詞を借りて次歌の惜れを述ぶ。  
も云  
鳥のえならず、曉の鐘  
も聞ゆら云々とす。唐紅  
度江、丹などを歎き、更に未(アシ)の者を  
ば  
詠りて明けなばと後く、夜明けなばの意。歸る山  
を拂り用ひたるに  
度江・丹、などをして、庭といひつて。丹は顏料とする赤き土。明けな  
て山ねに意味無し。かけろふ姿  
かげろふとは月光などの物の陰にならをいひ、また幻象の如く  
方の月の薄れゆく様す轉て、板の精の釣の如く消えゆくを叙す。  
方の月の薄れゆく様す轉て、板の精の釣の如く消えゆくを叙す。

三番目

六 浦 ムツ

九月 ワシキテ 楓ノ精(前ハ里女)

早秋聲上  
ヨウク  
思ひやうかへ遙ある。思ひやうかへ遙  
ガト一  
あつ東の旅よ出でゆよ  
これハ濟陽  
の島下う出でたら僧もてゆ。あれまた  
東國を貞多の程よ。此秋思ひのまち陸  
奥の累をもとも修行せどやと思ひ  
道行上  
(三人)  
寺切ヤ  
事  
さ  
し  
坂の。開の移もじら渴むがゆよ。開の  
寺切ヤ  
大浦

おむら過（さが）。さがしてよ。行くも遠とほを湖（こ）の。  
舟路（ふじゆ）を渡（わた）り山（さん）を越（こわ）え。幾夜（いくよ）か夜（よ）かの  
草枕（くさまくら）。明け行く室（むろ）も星月夜（せいげや）鎌倉  
山（さん）を越（こわ）え過（わた）。六浦（ろくうら）の里（さと）よ著（あきらめ）よ  
け。六浦（ろくうら）の里（さと）よけ。千里（せんり）  
行（ゆ）。一歩（いっぽ）よう。起（あが）つとあや。遙（とほ）と思ひ  
ゆ。日（ひ）を重（こみ）ねて。意（い）がひ程（ほど）よ。これ  
ぎりよ。日（ひ）を重（こみ）ねて。意（い）がひ程（ほど）よ。

はや相模（さが）の國六浦（ろくうら）の里（さと）よ著（あきらめ）よ。は  
此渡（このわた）をへて安房（あはう）の清澄（きよすみ）。あらす  
ぎりよ。日（ひ）を重（こみ）ねて。意（い）がひ程（ほど）よ。あうげある  
きのいを。へよ向（むか）。六浦（ろくうら）の稱名寺（めいじ）。寺（てら）と  
や申（い）。程（ほど）よ。まち寄（まよせ）。見せよ。やと  
思（おも）ひよ。のうへ。瀬贋（せぜん）。山（さん）の紅葉（こうよう）  
今（いま）を盛（のぞ）と見えた。ながら錦（にしき）を睡（ね）せよ

かくとも。都よりもやまとの中葉の紅葉の  
べきが。又これらある本堂の庭より楓の紅葉。  
木立餘の木よ勝れ。唯夏木立の如く  
ばまれのあきさま

も。一葉も紅葉せざる。いづかまゝぞ  
れの。あき事なり。人來つてゆきど  
り。春ねぞやと思ひ。シテのうへ。高僧ハ  
何事を仰せ。アリ。アリ。これハ都

よう。壯めて此處一見の者もいぢ。山  
中の紅葉今を盛と見えてゆよ。これ  
ある楓の一葉も紅葉せざる程よ。不  
審をあひ。シテ。アリ。げよよく。廣覽トドさう  
めて。いづくへ鎌倉の中納言為相  
の卿と申し。人。紅葉を見んとて此  
處ま來り。時。山中の紅葉。まだ

あうよ。この本一本よ限り。紅葉色。  
深くたゞじある。やも。為相の卿。  
取あへも。さて此一本よとくれ  
けん。山よかだつ庭のもみぢ葉を詠  
ト繪ひよ。今よ紅葉を停めては  
面白の。詠歌や。あれ數からぬ身  
あれど。手向のためよがくぞかり。まう

はうる。此一本の跡を見て。袖の時雨ぞ。  
山よかだう。あらあり。かたの。序  
手向よ。よ。此本の面白こそとそ  
り。手向よ。爲相の卿の  
唐詠歌よ。今よ紅葉を停めたる。  
いざれふ。ある事やう。げよば  
不審ば。ア理。かたの詠歌よ。頃う。時。

此本がよ思ひやう。かゝる東の山里の。  
人ヒトも通アガムじぬ。お寺の庭よ。わざハサマツ立  
ちて。紅葉せレバシ。しとシト。あつまアツマ詠歌  
すも頃ハヤハヤ。功成コニシ。名遂メタタク。身退  
く。とて。ほの道トトロ。ありそりソリ。たまタマ詞シ  
済スル。停スル。今よ紅葉やレバヤ。停スル。唯  
常磐木ミヤマキのノがくわハカハシ。これハ不思

議ハシマツのハシマツ事ハシマツ。此本のハシマツをハシマツ。まハシマツで。  
知シテ。うハシマツめハシマツたハシマツる。身ハシマツへハシマツ。ある  
人ヒトもハシマツ。もハシマツ。今ハシマツ何ハシマツ。て  
ひハシマツ。わハシマツれハシマツの木ハシマツの精ハシマツ。お僧ハシマツ  
たちハシマツ。もハシマツ。ゆゑハシマツ。よ。唯ハシマツ今ハシマツ現ハシマツ  
あハシマツたり。今宵ハシマツ。とハシマツよ旅居ハシマツして。  
夜ハシマツもハシマツ。はハシマツ法ハシマツを説ハシマツ。繪ハシマツ。重ハシマツねハシマツて。

姿を見え申さんと カテ  
外の空も  
冷ます。此古寺の庭の面。霧の籬  
の露深き。千瓣の花を咲かせて  
行く。も知らざりありよけり 行くも  
知らざりありよけり

中入

早<sup>（人）</sup>上歌  
待詔

もう秋の夜の月澄み渡る庭の  
おも寝らんものが面白や寝らん  
ものが面白や 後三句上  
吊りやあ。妙ある值遇の縁よトられて。  
ご度どより来りたり。夢みる覺ま  
し絵よあよ  
不思議やあ月澄み  
度る庭の面よ。ありつる女とおぼ

●仕舞

て諸人の心や春よりぬらひ  
櫻の花盛地 唯雲天のみ三吉野の  
千本の花よかくあ地 日経て。  
移地 べ変天、眺地か。櫻天へ散地、庭天の  
面天は變地きく卯天の花の垣根天や雪天よ  
まがよらん。時移り夏暮れ秋も半よ  
あうねね。空天定地あむむじら時雨。昨日天

●小説  
色あやす

六首

●仕舞

●サンクセ獨吟

國土悉皆成佛の。此妙文を競ひ給  
て。猶昔を語り終へ。それ四季  
をさうの草木。已の時をえて  
花葉すまごのその姿を。ひあれ  
誰うりよ地 まづ青陽の春の初  
色香妙ある梅の枝の。かつ咲きそめ

薄さもむぢ葉も。夜露時雨も。山へ。  
下葉残らぬ色どうや。まざりよても。

東の奥の山里よ

あがらさまある  
都人の哀も深き言の葉の露の情  
よきやれつ。姿をまみえ數よ。洞を  
かきも值遇の縁。深きち法を授けつ。  
佛果を得一め経へや。更け行く。

月の夜遊をす

地上二三尺

返ります

序ノ舞

秋の夜の千便を一

夜よ重ねても

詞

残りて鳥や鳴う

・仕舞

鳥の聲の鳥も。かもくよ  
明方の空の處。六浦の浦風山風。  
吹き去さう。吹き去さう。散る紅葉ぞの。

日よ照りそひて、からくれあゐの庭  
の面。明けあぐ恥か。暇申して。帰る  
山路よ行くすと思へど本の向の月の  
行くすと思へど本の向の月の  
姿とありよけり！

## 松山鏡

### 解題

越後守の山家をも小女、母に後れ姫母に遇ひたりしが、母の形見の鏡に映る己の姿を亡母と  
思ひ、毎に眺めて慕ひたる奉にすり、その冥歎の苦楚を絵い得たらことを作れり。今は  
マツヤマカガミと訓めとし。古くはマツノヤマカガミと称へたり。流布本尼傳書にも松の山鏡と異事。  
駒木作焉注文に作者不明。注文陳模に、若き夫婦一夜葡萄酒を飲まんとて通魔を開き、婦は己の姿の  
臺に映れろと見て夫が他の女を隠し置くものと思ひ。夫も亦婦が男を隠し置けるものと思ひて、共に  
婦の蘇り争ひしが、とりず東からいへ道人魔を碎いて其浮見ならを殺へ一かば、東婦初のて己等の姿  
なるを覚れりとの云々印度の説話を載せたり。傳教と共に傳來したる此説の日本化せられたるものや  
がて此の山の物語なるべし。

### 講ひ方梗概

曲柄に於て藍藻川に住に於て答行などに似たる曲  
なり。よく文意を味はひて一曲の趣を詠ひ表すべし。シテ  
やうに扱ふが宜し。故心得にて、かに罪人云々とかつてさらりと云  
て、詞をどつくりと言ふ。云々はいかに不思議やなほ稚りと来るべし。ツレ  
くくとのみは扱はきらべきも、さりとて重々となくも好ましくからず。出は子に引かされて限れたる  
母の亡靈の姿を擰て、子は親に云々と拘抑へて一つとくと寂しき風情に誰ひなす。母シよりはさらりと往い、餘  
といたる心にて猶派手に廣るる事をなす。子 大方の子方と同く御子高めに歌ひてさらりと往い、餘  
く、クセの上端は素直なるべし。さきやうに御せりれば云々はすらうと應へ、母が姿をの邊を  
處なれば、其心にて少く静めなうべし。さきやうに御せりれば云々はすらうと應へ、母が姿をの邊を  
指ゆうやかに扱ふ。恐め一や云々はクリの調子にてかゝつてきらりと出で、ツキキは少く心入れあるべし。  
一方の摺合はすらうと前け渡す。ツキ 長き詞多くてツキ方にての習物なり。殊に前半は主要なり。後半れば、  
すらうと前け渡す。一方に往を取り、あらぬ愁さ云々との詞は、半ば諷めたり所なれば、いわ  
あら不思議やと驚きたる様むらく、以下文意につれそれほどの心持復急むべし。これは不思議なる  
事を云々と言語過解の事云々との詞は、抑へて確りと起つてかに姫があくかと氣を更へてかゝつて云ひ、  
づれも能く文意を味ひだれぬか序破急をつけて確りと言ふべし。地 初の上巻はちからん強ま  
けてつづりと前け渡すに思ひ。すらうと前け渡すに思ひ。すらうと前け渡すに思ひ。云々はす  
らうと前け渡すに思ひ。あれこそ母上御覽せよとかつてつけに京ぎりさ



一つの語。遠行遠く家を離。三日月の云。早朝の舟を三〇月に晴へ、古里の云。長き年月を経て、新郎古今集の秋波卿の軒端の萩を吹く。ついで、あらぬ妹脊の云。他の女と夫婦の契を結んで、見し世の露キ袖にこぼることを引く。つてて、あらぬ妹脊の云。他の女と夫婦の契を結んで、見し世の露キ袖にこぼることを引く。妹脊は夫婦の古語。妹脊の川は女歌に夫婦に寄せて、風に見し世の露キ袖にこぼることを引く。以下、妹脊の川、川波主ち、主ち降ろべきといひ次ぐ。達ふ事鏡の片あらじきの帰るべき事の金ふと、二人の達ふとを並んでいふ。以下、其あふ。半月の山の端にまでおち廻してといひはんあの序な事の難きを形見にかけ、鏡の割れを残にかく。遙くとは頭をも名を磨く高譽を耀せられの金ふ。陽け得の意。名を磨くそら意。冥官冥官の五界の要惡とれす神。俱生神一切の人間の出生と俱に生トて人の要惡を祀。一て、閻魔法王に報告する神。瞑恚の云。瞑恚を粗大に嘴へたる用例多きより、燈え主へと言ひ。宣揮の聲、體は云々と後けたゞ。熟識の聲は地獄にて歟。辛が罪人を切つに用ふるもの、空揮の聲は揮のめけがら、體は死屍にて、其心を存せずるを揮のめけがらに見立てるなり。魂は冥途に至り。處世に止り。魂は冥途に至らと云ひ。慣は一大らなり。二にル斯く即ち。玻璃の鏡地獄にて歎辛が亡者を引つさげ、引きもけ生前の要惡を映し出すといふ。鏡、淨玻璃鏡。衣の張たて張りの音を傳む。一には如何に女人のこととて悪業の影映り一かば、驚きたる体にゆれり。王釵玉のかんざし。さと漏るは訛者。と漏るは訛者。かじみて、屈一御室に云座にかゝる意き姿の映り一ことはまだ見聞せキ。音聞ゆるは佛菩薩來觀に等々奇瑞なり。聞かす云。殊最後の一節野寺より。ナハヤ云。此最後の一節野寺より。悟りたりと見ゆ。

## 五番目

## 松山鏡

無季

ワシツ子方  
キテ母娘  
父生神

早朝  
これへ越後の國松の山家のよ住まひある  
者もては。すても其ホウトケ添ひあれ  
妻よおくれ。昨日今日さん存ひども。  
はや三年よおうては。又老れ形見よ  
姫を一人持ちてゆう。歸りよ母カロカラが事カロカラを  
歎きの程よ。對の屋を造り傍よ置き

てゐ。又今日やれり母の今日こそ  
程よ持佛堂モダラサシヤマより立ち出で。燒香せどやと  
思ひしモカサシシヤ雲ヨクスをあり雨ヨハをあり。陽臺ヨウテイ  
の時留モリメニの難く花ハナを散ハラフり雲クモを消ハシムえ。金  
谷カネヤマの春行モリメニくもあ。日々の道ミサカよ閑守カニシキ  
あけれど母御モカニよ離ハセバれて今年カタマリへはや。  
既アハよ三年ミツの其日ヒあり。あら無慙モタタキや。

何事やら姫モモコ獨言モロコトノカタを申スル。いよ姫モモコ  
あるが。ひづか來スルたまご。持佛堂モダラサシヤマをあけ  
べ。あら不思議モタタキや。何やら物モノをまうち  
隠カモフさずよ。さうよ姫モモコ。なんもせが母よ  
おみて。一時モチえ結モリか。廻ハラフせやかと存  
ゆひつて。一族イチヅクのみの讀モロコシよう。今  
までほせのほまひたり。せ思モモシすからば

父一所よおひしゆくま。かすねども  
對の屋を生つ置へる。かくよひだ  
來つて。かよひく。かよひく。かよひく。  
まちゆき。まちゆき。まちゆき。何やく  
やれ。まちゆき。まちゆき。まちゆき。  
人のゆきが。宣ゆて。まちゆき。かげよ  
せりかの母。や木像。よ作り。明暮。呪。喧。

あると。ひへ真。か。何。ま。か。や。う。あ。れ  
あ。れ。ひ。め。ど。持。ち。て。あ。る。母。や。木。像。  
田。た。ん。經。念。佛。一。あ。ひ。て。い。ふ。死。一。た。ち  
母。の。成。佛。一。お。い。い。の。四。一。蓮。の。縁。と  
あ。い。び。か。れ。た。と。か。へ。じ。て。か。や。う。よ。だ。う  
一。か。事。や。謀。ま。ば。じ。一。く。ま。ひ。か。か。母。や  
奈。落。よ。や。み。お。と。む。か。四。一。罪。よ。沈。む

「おまきのおひじり」<sup>おひじり</sup>。何ぞ、物をも  
ゆなみぞ <sup>子房かたよ</sup>。かわすよ御比うひをも。  
隠すも申うべ。痛ちや母座前。今を  
隣の門時。この鏡やわざよ取らまう  
あり。母の姿を残を形見あう。寧々き  
時く見うべと仰せゆひ。程よある時  
此鏡を見れば母の面だて映つてよう。

猪若やまぞ見え絵へば <sup>地上樂</sup>。猪へもう  
らん跡までも。猪へららん跡までも。  
添ひ添へんぞ面影を。残すせ絵ひ  
ける。母御の慈悲を。あうがたま。不審よ  
思ひ。めされば。見せあらせん鏡山立ち  
おり。絶え又座前立ちよう絵へ又座前

單行  
ひれハ木思議ある事をゆきものか。

室へあつて母の何によ鏡よ映りて  
見えたが。但一あつと思ひ出一な  
事のは。漢の武帝の后李夫人がく  
をを絵じて後帝后の別を悲み  
絵ひ。而姿を甘泉殿の壁ようづ。  
明暮。肅覽あつてかども本より繪よ  
やけつ形あれば。物を笑ともあらく

憂そ増る。悲み絵。或つ時仙人の  
告げて曰く。眞后の而姿を肅覽あ  
りた。思一めなべ。月の夜の隈あ  
らしよ。反魂香を焚き絵へとあつ  
か。教よ往せて月の夜のよまがよ。  
反魂香を焚き絵へと。烟のうちよ后  
の而姿を先絵ひたぬもあつ。又

我朝の聖武天皇の后光明皇后  
おもむらせ繪ひて後。こゝの御別  
を悲み繪じ。梵天よ祈也。志繪へぞ。  
國王憐み繪じ。玉の輿よせ奉り。  
ハたじが安達よ送り繪ひためも  
あう。さうあむらそして。上代の事。これ  
末葉の今の中よ。かやうの事のあく、  
一

かわらぬ事のなまむ。されど母も娘よ  
夫娘が連れて惜みゆきほゞよ。若く又  
かやうの事かよ。ふらふら寄りて  
鏡を見や。かな。や。かしだとく條ある  
をまかゆ。や。あ。じよ姫。この鏡よ  
母の影の映る事かよ。何ぞて  
條ある事かゆ。も。 悲めしや

あへ程母のまゝまを。田ひ隔て山  
鳥の愚よ見かせ給ふと。鏡の前よ  
位き居たり げよや別れでの後も

未だ半ぬ袖よ。黒妻を重ね給ひなれば。  
其悲よや恋衣の見えとと思ひめま  
うらめ。又よどそ疎くよ。 カナト  
より見えよたうちねの親の御よ。磐

の懐のよと細。誰をかむ。恋ひ瘦せ  
頬ぞ見ても泣く。度かみみの悲や。あ。  
底より墨うす眞澄鏡。あへこそ母よ  
度覽せよと我。う影よ。指をなも。げよ  
哀あうなれどこそ幼き身のひあれ  
幼き身のひあれ 言語道断の事。

我が影の鏡よ映つて見て。母が影よて

あきらかに申はれ  
いよと申はれ

山家と申す。無佛世界の處こそ。女

あくまの鐵將棋をつけ。色を飾  
り事もわかれ。さて鏡をと申す  
ものも知らぬ。其一年都へ  
ようこそ。鏡を一面買ひ取つてやれ。  
母よ取らせ。せよおき事よ

怪びゆ。今との時姫を送づけ。  
あれや驚く思ふ。此鏡を見よ  
と申へば。我が影の映るやを見て  
母と思ひ歎く事の不便なれば。いや  
いや所詮鏡のことを語つて。歎を  
停めどやと思ひ。やあ、いよ姫。總  
て鏡といふ物よ。何よもあひて向ふ

物の影の映つぞよしと見てへ。

父子方かなよがまち寄れどよう影扇ひきわを映せん扇

の影かげ。こそいつて思ひ知れおもひげよ

よ父子方かなよの作つくの如く。今とそかくよも三

吉野よしの

早

朝

底

ある

影

も散

り

麻

け

バ

底そこある影かげも散さんり散さんり、早はやく款たんおのの日影ひかげをあやまつ

早はやははあさよ

地ぢ

母おやよ似いにしへけるよと我わが影かげあるからあつか

」やや早はや父ちちよかきくれてよかきくれてややあれ

とそん日暮ひぐれられ。面目おもての鏡かがみややア

ふふ親おやよ似いにしへるあるものと思おもいて。恋こゝい

ときとき。鏡かがみをぞ見みう。往むか事じ渺茫渺茫とときてきて夢ゆめよ似いにしへたり。舊いと遊は零れ

落として半。泉よ帰を  
水としもんとをへぞ 即ち漢女トトアハカ、  
粉を添ふ鏡清華トトカヒラたり 花と  
いをんとまへば 蜀人文スリトハシムを添ふ錦スルシマツ  
われこそも汝婆の故郷トトカヒラよ立ち帰スルシマツらば錦スルシマツの  
う。錦スルシマツの袴スルシマツ君スルシマツため 背スルシマツを語スルシマツ。  
申までトトカヒラ夢スルシマツ驚スルシマツか。絵スルシマツよよ端スルシマツ

唐土よ陳氏トトカヒラとて。賢女の向えありけ  
よ。せの習思トトカヒラとも夫遠行スルシマツの手細  
あり。これや限スルシマツと思ひけ。形見スルシマツの鏡破  
りて猶スルシマツを残スルシマツる三日月スルシマツの宵スルシマツよ待ち  
明スルシマツけて恨スルシマツみをも絶スルシマツえをも未スルシマツを。憂スルシマツま  
年月スルシマツを古里スルシマツの軒端スルシマツの萩スルシマツの秋更スルシマツけて  
風スルシマツのたよりのつて向スルシマツけ。夫スルシマツハ其國スルシマツの

まとあらあらぬ妹背の川はのまち  
晴らべてもあ。さてへ違ふ事む。  
形見の鏡あれ獨。後あるよ影見  
れ。半月の山の端ようち傾とて泣  
くもとせん方もあるぞうふ。よ  
くさくよしむ知らざり  
地鶴づら  
飛びあ。陳氏の肩よ羽を休め。飛び

めぐり飛びかがり。舞ふよとみ  
不思議やああ。鏡のあれとあり。  
もとの如くよありよけり。滿月の山  
を生て柏石を照るやう。これや  
賢女の名を磨く鏡あらべ。  
いよ罪人何とて隣を。片時の暇  
といひつよ。冥官怒をあ。絵へど。

惧生神急ぎ苦惱を見せよとの竹を  
蒙り。眞恚の燃え立つ熱鐵の筆を  
振り上げて 太鼓頭 地上空蟬の空蟬の殻ハ  
婆婆よやとまわらん。筆ハ冥途よ  
もぬけの衣の。彼晴の鏡の。さばよ  
き面前よ。つづけを向ひあひ見よ  
婆婆よての。罪科よ 舞動 笠井道 いよ

## 仕舞

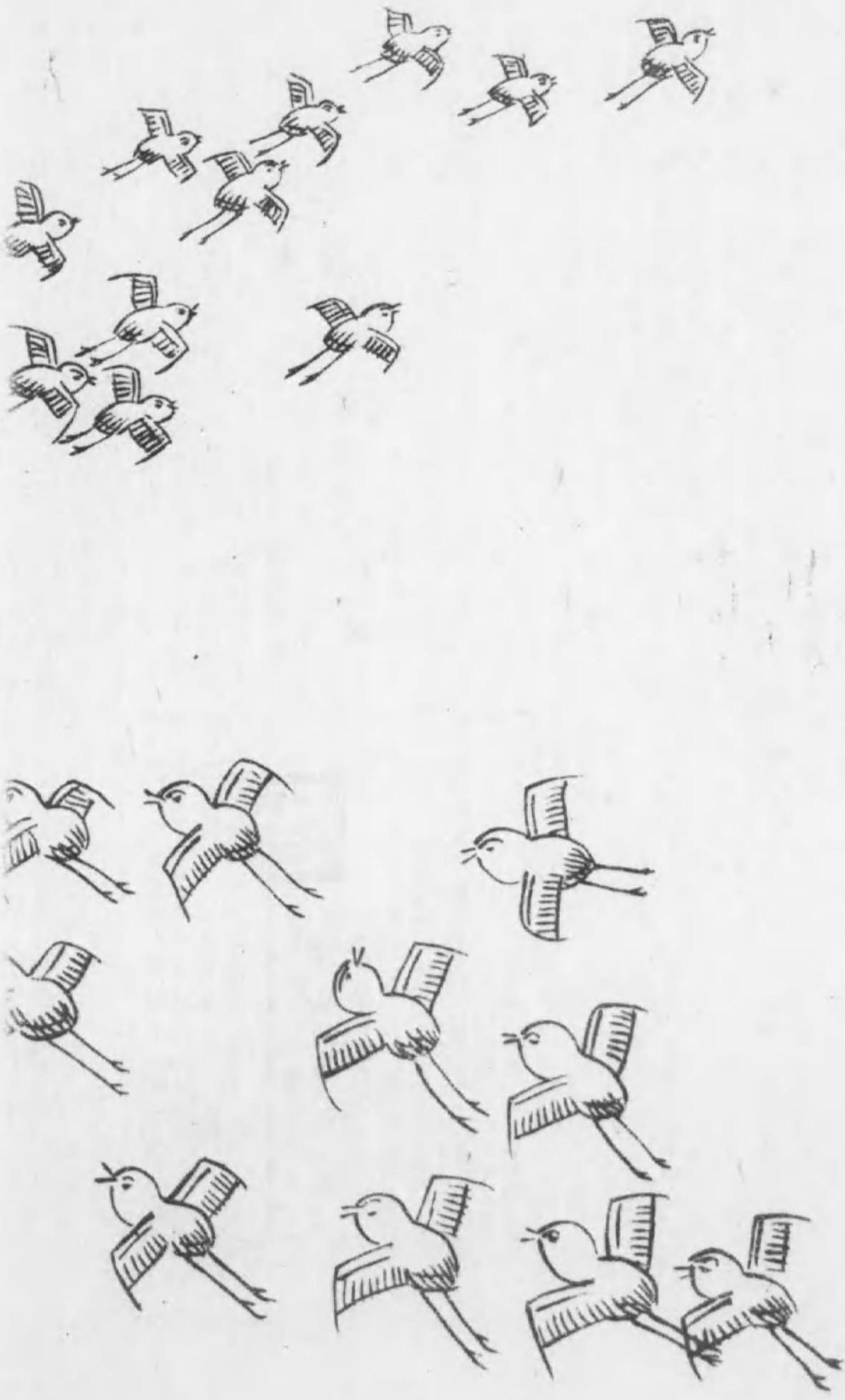
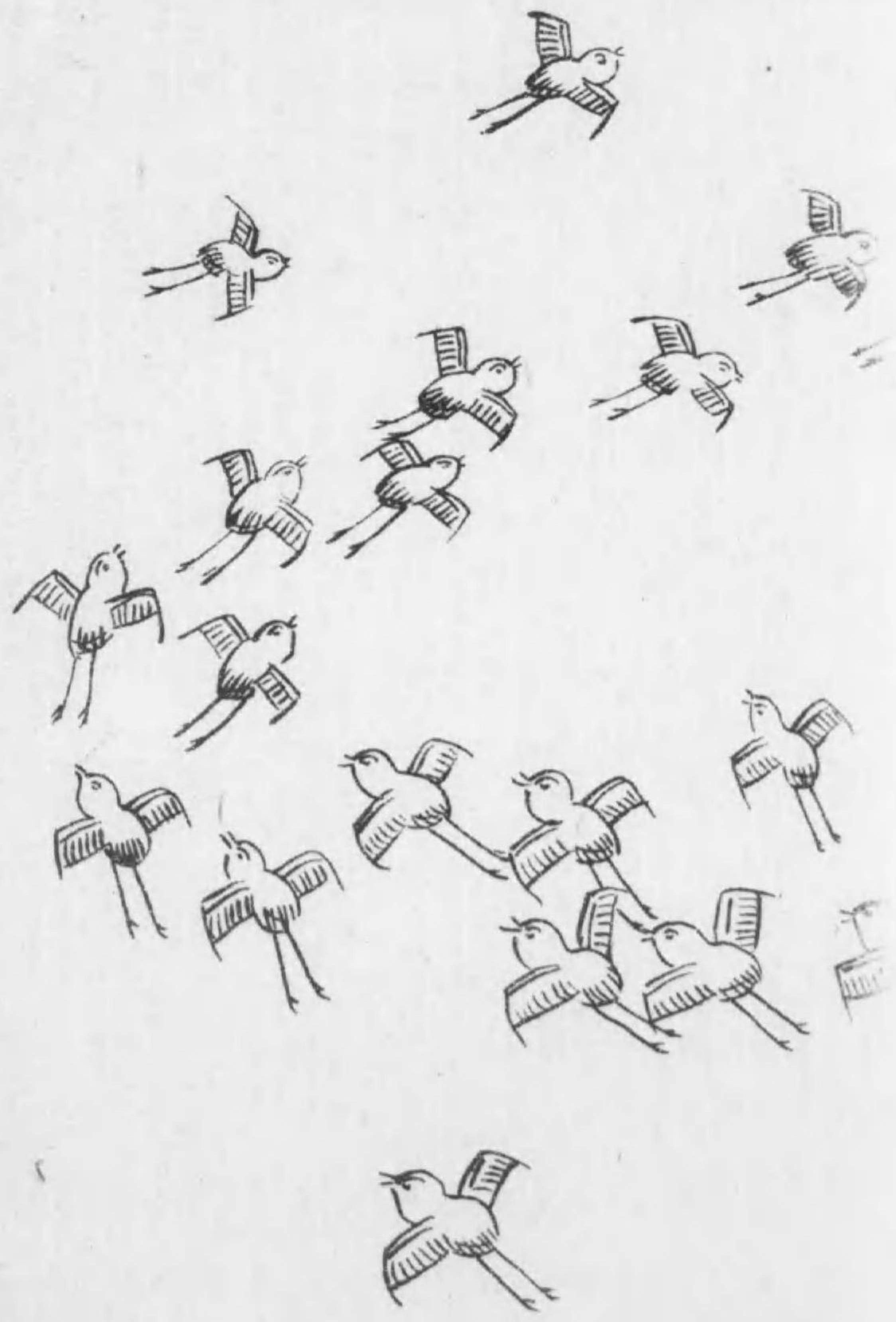
不思議やあ ト トといふよ不思議やあ、  
奉子の手ふ功力よよつて。鏡の影を。  
よく見れば。頭よ玉釦。膚ハ金色  
兩脣をかざみて手を合せれど。かま  
から菩薩の。坐像かとおぼす花うす  
虚室よ音樂。向うぞ見もせぬ冥途  
の奇特。そんや地獄よ帰らそとぞ。

## 頭よ

地をやつし。踏みあらう。  
元々、  
踏み破りて、奈落の底よそ。  
けり。



670  
671



終

